

渡部徹の歴史学

——関西・社会運動史研究史序説

黒川 伊織

はじめに

- 1 小山弘健と渡部徹
 - 2 文化運動の一翼としての歴史学運動
 - 3 渡部徹の歴史学——政治主義批判から実証主義へ
- おわりに

はじめに

1950年代から1970年代にかけて、日本近現代史の一翼としての社会運動史研究の拠点として機能したのは、京都大学人文科学研究所（以下、京大人文研とする）とその周辺に結集する研究者が生んだ研究の〈場〉であった。その中心にあったのが、京大人文研教授の渡部徹（1918-95年）と、彼が率いた京大人文研共同研究「社会運動の研究」班（1966-81年）である。実証的歴史研究の場であった「社会運動の研究」班からは、松尾尊兌（1929-2014年）、岩村登志夫（1934-2019年）、飛鳥井雅道（1934-2000年）、田中真人（1943-2007年）らによる優れた研究成果が生まれ、本特集の伊藤晃氏インタビューで語られた運動史研究会（1977年創設）が残した当事者からの聞き取り記録と並んで、現在でも社会運動史研究において参照すべき重要な先行研究の位置を占める。

本稿では、まずは、敗戦後に日本資本主義論争史や労働運動史をいち早く論じた運動史研究のパイオニア・小山弘健（1912-85年）と渡部の出会いに立ち戻って、渡部にとっての「共産党経験」を見たうえで（第1節）、1950年代後半の京都・大阪で取り組まれた歴史学運動の試みと、その成果を確認する（第2節）。そのうえで、徹底的な資料の渉猟と「聴き取り調査」の実施により、政治主義を排して実証主義を貫いた渡部の歴史学の〈場〉としての労働運動史編纂事業の経験、そして「社会運動の研究」班の成果を見ていくことにしたい（第3節）。

1 小山弘健と渡部徹

(1) 小山と渡部の出会い

運動史家として『戦後日本共産党史』（1958年）、『日本の非共産党マルクス主義者』（1962年）、

『日本社会運動史研究史論』（1976年）、『続日本社会運動史研究史論』（1979年）など多くの著作を残した小山弘健もまた「素人学者」であるといえる。大阪市西成区に生まれた小山は、大阪市立天王寺商業学校在学中に左翼文献にふれ、卒業後は「親がかりでおってマルクス主義もないもんだ」という自立心で労働者の道を志し、大阪商船に入社して海上労働運動に参加した。貨物船・貨客船での勤務の傍ら「一人だけの海上マルクス主義大学」で猛勉強を続けた小山は、戸坂潤に見出されデビューを果たす（『軍事技術リード』説批判『唯物論研究』58号、1937年）。1941年に大阪商船を退職した後は、大阪商科大学の上林貞次郎らとともに、講座派の継承を目指す研究活動に入り、敗戦後に共産党に入党して社会経済労働研究所を主宰しつつ、民主主義科学者協会（民科）大阪支部で渡部と出会う（小山1985）。

渡部は、旧制豊中中から旧制六高を経て1939年4月に京都帝国大学経済学部に入學した。在學中の1941年1月、「京大内非合法共産主義者グループ」事件により検挙されるも、堀江保蔵ゼミで卒論「日本労働政策史」を提出して陸軍での兵役（1942年10月-45年9月）についた。この兵役期間中に、京都帝大の先輩でもあり、治安維持法違反事件で検挙された後、原隊に復帰してきたばかりの一等兵・野間宏（1915-91年）と出会っている（渡部1981）。敗戦後の渡部は、共産党に入党して京都帝国大学での学生運動再建にも尽力し、京都大学大学院に学ぶ傍ら、民科大阪支部で小山に出会った。小山が率いる社会経済労働研究所に参加した渡部は、1947年11月に初めての著書となる『近代日本労働者運動史』を刊行することになる。

（2）『近代日本労働者運動史』の刊行

『近代日本労働者運動史』は、1946年末から翌年春にかけて渡部が執筆した草稿に小山の監修を加えて刊行された。その目次を以下に示しておこう。

- 1 第一次大戦と労働者運動の興起（1917-19）
- 2 戦後反動恐慌とサンジカリズム（1920-21）
- 3 全国総連合運動と方向転換（1922-24）
- 4 総同盟の分裂と評議会の成立（1924-26）
- 5 無産政党の成立と対立（1925-27）
- 6 日本共産党の再建と活動（1926-28）
- 7 合法と非合法の相剋（1928-30）
- 8 戦争と社会民主主義（1930-32）
- 9 革命運動の高揚と衰退（1932-34）
- 10 人民戦線運動（1935-37）
- 11 支那事変と労働者運動の分解（1937-39）
- 12 産業報国運動と労働団体の解消（1939-41）
- 補論 敗戦後の労働者運動（1945-46）

のちに渡部自身が省みるように、「労働組合運動は社会主義運動と結合することによってより高

い段階に発展し、それは共産党の指導によってのみ正しく発展する」という「革命史観」に貫かれた同書であったが、意外にも共産党から激しい批判を浴びせられた（渡部 1981）。その原因は、同書で「終始プロレタリアートの利益を代表し、天皇制政権と侵略戦争に対する唯一の実践的闘争者」であった共産党が、「組織上」「戦術上」での「無数の失敗、混乱、過誤をくりかえした」ことを批判した点にあった（渡部 1981）。

渡部がこのようなかたちで批判を行うに至った背景には、敗戦後に自身が実践のなかで感じ取った共産党に対する不信感が大きくあった。たとえば、京大での学生運動の再建にあたって、せっかく育てた優秀なリーダーが、「共産党の命令で、つぎつぎ党の常任として引き抜かれ、学生組織は共産党の学外活動家の発見の場に利用され」る事態に困り果てた渡部が共産党京都府委員会に抗議を行っても、府委員会の幹部は「共産党の発展が第一義」であり、「ビラはり何年、ガリ切り何年が革命家の当然踏むべき道」だと、抗議を一顧だにできなかったという（渡部 1966）。民科大阪支部でも、労働組合運動でも、このように「党利党略本位で大衆団体を利用する事例が続出」していることに、戦時下での抵抗の時代から夢見た「何よりもヒューマニズムにあふれ、人間の善意を尊重するはず」の「革命党」の現実の姿——「大衆は単に利用すべきもの、党のためを思い、方針に意見や批判を言うと、すぐ党に敵対するもの、異端者として、ひたすら権威を嵩に抑圧しようとする」——に渡部は「幻滅の悲哀」を感じるほかなかった。「小山弘健・久野収氏らの恩顧をうけ、反ファシヨ統一戦線・人民戦線に感銘が深かった」渡部が抱かざるを得なかった、共産党の硬直的体質への批判も『近代日本労働者運動史』には込められていたのだ（渡部 1966）。

（3） 京都大学人文科学研究所へ

1949年5月、渡部は京大人文研（日本部）助教授に着任し、日本共産党京都大学人文科学研究所細胞に転籍した。当時の個人研究のテーマは「第一次大戦後の日本における労働運動」であり、発足したばかりの人文研共同研究「日本近代化研究」班では、「徳川封建制経済概観」「幕末の生産段階」「幕末商業資本の諸問題」について報告を行っている。

このように本来の専門からはやや遠い時期についての研究を深めざるを得なかった背景には、共産党からの政治的抑圧が大きく影響していた。『近代日本労働者運動史』刊行の際、共産党関西地方委員会の経済学者内田稜吉により「査問」された渡部は、同書を絶版にするとともに「以後、私[渡部-引用者]の書くものは党の検閲を経た上で発表する、という処置に従わされる」ことになったからだ（渡部 1981）。自由な発表の場を奪われた渡部は、京大着任後から携わっていた教職員組合の運動に献身する。京大職員組合書記長（1949年7月-50年4月）、京都地区大学教職員組合連合委員長（1950年5月-52年4月）、日教組近畿地区協議会大学部幹事長（1950年6月-51年5月）を務めたのち、1952年4月からの1年間は京大職員組合中央執行副委員長の要職につき、職員組合を共産党の「火炎瓶闘争」⁽¹⁾路線に引き込もうとする共産党との対抗に、「大変な時間とエネルギー」を費やしたのだった（渡部 1966）。

この時期の共産党は、1950年1月のコミンフォルムによる日本共産党の平和革命論批判（コミ

(1) 1951年10月の日本共産党第5回全国協議会以降の共産党がとった中国革命を範とする武装闘争路線の通称。1952年4月の独立回復前後から7月にかけてが最盛期であった。

ンフォーム批判)に端を発する党内対立(主流派と国際「諸派」が抗争した「50年分裂」)の最中にあった。「分派闘争には批判的」であっても「それまでの権威主義が失墜することは歓迎すべきことと思った」渡部は、どちらの派にも与せず「傍観者」の立場をとった(渡部1966)。ところが、このような党内の混乱は、渡部の研究活動を「抑圧」してきた党の「検閲」を「ご破算」としたため(渡部1981)、京大人文研に着任してから渡部が個人研究として着実に取り組んできた日本労働組合全国協議会(非合法共産党の指導下にあった赤色労働組合、略称全協、1928-34年)に関する史料収集と研究の成果を矢継ぎ早に公表することができた⁽²⁾。しかし、「火炎瓶闘争」により「暴力的な形までとって」復活した権威主義は、朝鮮戦争の休戦協定が結ばれたのち(1953年7月)、党内で苛烈な党内闘争を生み、渡部もこの渦に巻き込まれていくことになる。

(4) 共産党からの除名——「神山派」として

しかし、注(2)にあげた諸論文をまとめ、文部省研究費の助成を受けて刊行した著者『日本労働組合運動史』(青木書店、1954年7月)には、共産党からの容赦ない痛罵が浴びせられた。共産党理論誌『前衛』1955年5月号に掲載された同書の書評は、「文部省から数十万円の研究費をうけて出版され」たことをわざわざ注記したうえ、「党と労働者階級の闘争に傍観者的批判を加え、きわめて悪質有害な役割を果たすものとなっている」との「誹謗を加えた」という(渡部1981)。

この「誹謗」の裏には、1954年9月24日の『アカハタ』に、党中央委員も務めた神山茂夫(1905-74年)の党除名処分が発表された際に、神山と協力して「党を内外から破壊しようとした次の分子」として渡部、小山弘健、浅田光輝、茂木六郎の名があげられたことがあった(渡部1966・1981)。神山の著書『戦後日本国家の諸問題』(1953年)を「最大限に賞賛した書評を書いた」ことが、渡部への「誹謗」につながったのだ。小山・渡部と神山の付き合いは、1940年代後半、小山・渡部の社会経済労働研究所と、慶應義塾大学にあり栗原幸夫(1927年-)からも出入りしていた日本経済機構研究所の関係にはじまる(『渡部徹先生を偲ぶ』)。後述する宍戸恭一も当時慶應の学生として日本経済機構研究所に出入りしており、この宍戸との関係も、関西での社会運動史研究興隆の前提となっていくし、のちに栗原は、運動史研究会(1977年結成)において再び渡部と仕事をしていくことになる。

この渡部への処分=除名処分は、京大内部の共産党組織に激震をもたらした。なぜなら、京都府委員会にとっても渡部の除名処分は「寝耳に水」であったからだ。共産党の規約によるなら、除名処分とする場合には「本人を査問した上で、行わなければならない」のに、渡部は京都府委員会から査問を受けていなかったどころか、「何も調べられてはいない」状態で党中央から除名処分を下されていたのだ(渡部1981)。

当時の京都府委員会・京大細胞の混乱は、「50年分裂」を「克服」した日本共産党第6回全国協議会(六全協、1955年7月)後の関西地方党会議(1955年9月、共産党大阪府委員会で宮本顕治・志賀義雄ら中央幹部を迎えて六全協決議の説明が行われ、関西各地の党機関から党員が結集した)

(2) 「日本労働組合全国協議会(全協)史資料(1929年末まで)」『人文学報』1号、1950年12月、「日本労働組合全国協議会の成立事情」『人文学報』2号、1952年3月、「全協史資料(1930年1月-31年4月)」同前所収、「全協刷新同盟問題について」『人文学報』3号、1953年3月。

で、京大細胞の芝原〔文学部国史学科学学生の芝原拓自と推測〕によって、このように語られている（『関西地方党会議事録』1955年、引用文は原文ママ）。

渡部徹氏の処理はひどいもので形式も規約も蹂躪されている。細胞はそのときメクラであった〔渡部が執筆した神山本の書評への『アカハタ』の批判について一引用者〕。渡部氏は党が書いたものでなら、なぜ同志的批判をしてくれないかと機関に意見書を出したが、それについて返答もなくそんな意見書を機関に届ける細胞指導部もおかしいといわれた。このことは西の学界対策でやったといわれている。

前衛6月に神山批判がのり、『アカハタ』に神山除名を発表する前に何ら事実審査もしないで渡部氏の除名が発表された。このような疑惑の事実細胞は何も知りませんでした。ただどこからか「闘え闘え」という風が吹いてくる。細胞責任者は『アカハタ』発表前日に府委員会に渡部と闘う体制をつくれ、他の指導部メンバーにもこのことは言うなといわれて細胞指導部はこまりました。

神山分派のために京大の教職員の同志のエネルギーはなくなっている。『アカハタ』で発表されたことは、社会学者としての生命をなくすことであり、発表のあと査問されることは、死刑判決のあと起訴されるのと同じだと言われている。

なかなか理解に苦しむ文章であるが、上部機関に振り回された下部組織の強い怒りが読み取れるだろう。相互批判を前提とする前衛党の組織論がありながら、渡部は一方的に断罪されて相互批判＝「同志的批判」の場は持たれなかったし、渡部を査問することなく除名して、「闘え闘え」と騒ぎ立てるようなこのような上部機関のあり方こそが、六全協後に多くの党員を失望させたのだった。そして、この一文は、共産党の権威が学問研究を呪縛していたことをも告発している。「西の学界対策」については不明な点が多いが（渡部の除名処分と前後して旧国際派の井上清（1913-2001年）が京大人文研に着任したことが影響しているのかもしれない）、『アカハタ』で党除名が発表されることを「社会学者としての生命をなくすこと」とまで言い切るほどに、共産党からの批判が学問的研究の価値判断を左右した時代が、確かにあったのだ。

同じく除名された小山は、生活に窮した。京大人文研が、共産党を除名されたからと渡部を截首することなどあり得なかったが、共産党員の教官が圧倒的に多かった大阪市立大学で講師の職に就いていた小山は、あっさりと市大そして民科も追われ、「本を出していた出版社にも廃棄せよとの圧力がかけられて生活源をうばわれ、ギリギリのところまで追いつめられた」のだった（小山1981）。

（5） 言論の「解放空間」とその閉塞

1955年7月、日本共産党第6回全国協議会（六全協）により党分裂を「克服」して議会主義へと共産党が転換すると、まず噴き出したのはマルクス主義歴史学への違和感である。1955年11月に遠山茂樹・今井清一・藤原彰の共著として刊行された岩波新書の『昭和史』に、亀井勝一郎が「この歴史には人間がない」と批判して「昭和史論争」が生じたのは、その象徴的な出来事で

あった。1956年2月には、ソ連共産党第20回大会でフルシチョフによるスターリン「個人崇拜」批判（スターリン批判）も行われたことで、共産党の「権威」の学問研究に対する介入への批判⁽³⁾や、「32年テーゼ」／講座派理論を機械的に当てはめる日本近代史研究への批判も生じており⁽⁴⁾、このような「前衛党」の揺らぎを背景に社会運動／労働運動史研究が活性化していくことになったのだ。

共産党を除名されていた渡部は、井上が率いる共同研究「米騒動の研究」に加わるなどして、職場での研究生活を続けていた。1955年1月1日付の『アカハタ』に掲載された、共産党の極左冒険主義に対する自己批判にも「自分に関係するとは信じなかった」渡部が「情勢の急変」を察知したのは（渡部1966）、1955年5月、左派在日朝鮮人の大衆団体である在日朝鮮統一民主戦線（民戦）の第6回臨時大会での韓徳銖による「これまでの方針・指導の誤りを峻烈に糾弾」する演説を目にした時であった（渡部1981）。

六全協後に京大細胞から復党を乞われた渡部であったが、「六全協前の党の誤りを徹底的に糾明し、責任の所在を明らかにする」ことを党復帰の条件として細胞側に突き付けた。1955年末から翌年春にかけて、京都府委員会にとどまらず、関西地方委員会、さらには代々木の日本共産党本部まで行き幹部への責任追及を続けた渡部は、極左冒険主義を主導した「名だたる幹部」が、「何もかも間違っていました。申し訳ございません」と「ただ平あやまりに謝るだけ」の「ダラシなさ」に、「共産党とはこんなものかと、ホトホト呆れる思い」がしたという（渡部1981）。そして渡部は、これを機に「本当の共産党に作り直すのだと再建の先頭に立つ」が、スターリン批判と、これにつづく党内での宮本顕治による権力掌握過程に「アイソがつき」、1959年4月に離党を声明するに至る（渡部1981）。

2 文化運動の一翼としての歴史学運動

(1) 京都現代史研究会の発足

こうして共産党を離れた渡部の研究生活は「新しい時期」に入るのであるが（渡部1981）、この再出発にあたって渡部が精魂を傾けたのは、「本当にやりたかった組合史」であり（渡部1966）、その仕事が1959年の『京都地方労働運動史』の刊行へと結実する。この『京都地方労働運動史』については次節で改めて触れることにして、まずは1950年代後半の渡部の社会活動と同時代京都・大阪の文化運動の展開を確認しておこう。

1950年代後半の日本では、高度経済成長期にさしかかるなかで、60年安保闘争に向かう労働運動・文化運動も空前の盛り上がりを見せていた。1955年には総評の主導により国民文化会議が誕生し、戦後文化運動を担ってきた共産党系の文化活動家の多くが、国民文化会議に参加する。戦後文化運動の一翼にあった歴史学運動も、「国民的歴史学運動」の混迷を脱して、大学や職場のサークルを基盤とした活動を行っていく。

(3) 井上清「党の規律と研究の自由」『前衛』臨時増刊号、1957年9月。

(4) 山辺健太郎「主として社会科学の問題について」『前衛』臨時増刊号、1957年9月、江口圭一「独占資本主義および人民戦線にかんする2,3の問題——32年テーゼ批判序説」『新しい歴史学のために』50号、1959年2月など。

民科大阪支部で活動してきた経験を持つ小山や渡部は、このような時代潮流に呼応するかのよう
に京都で「現代史研究会」に参加していく（機関誌『現代史研究』）。その発起人は、京都・寺町二
条に今も続く書店・三月書房（ただし2020年内に閉店の予定）の経営者である宍戸恭一（1921-
2017年）であり、会の事務所も三月書房に置かれた。宍戸の証言を引いておこう（『渡部徹先生を
偲ぶ』）。

渡部先生のことを考えてみますと、私は50年から現在までちっぽけな書店をやっているわけ
ですが、その最初に私自身の出発の方向を与えてくれたお一人が小山さんであり渡部先生で
あったわけです。こういう先生方の生き方を生かす方法はなかりうか、同時に私もそれに参加
させていただいて、自分の考えをはっきりさせていきたいと考えて、56年頃、現代史研究会
を作ったわけです。その時に、小山先生、渡部さん、井上さん、亡くなった岸本英太郎さん、
こういう先生方に月一回集まっていたいただいて、主として戦前昭和期の問題をテーマにして論議
していく研究会を数年間続けたわけです。

岸本英太郎（1914-76年）も、渡部と同じく旧制六高を経て京都帝大法学部に進んだ。卒業後
は、京都市役所社会課で西陣機業の実態調査に従事したのち東亜研究所に転じ、1942年2月には
「京都市役所内左翼グループ事件」に連座して治安維持法違反で検挙された経験を持つ（『京都地方
労働運動史』）。戦後は専修大学を経て京大経済学部に着任し、社会政策学会の重鎮として活躍して
いくことになる。

『現代史研究』1号（1959年5月）には、神山派として除名された浅田光輝（1918-2006年）や、
旧国際派であり埼玉で現状分析研究会を率いる津田道夫（1929-2014年）らが論考を寄せ、2号
（1959年7月）には、吉本隆明（1924-2012年）の「異端と正系」を掲載するなど、共産党批判者
による闊達な言論の場として『現代史研究』はあった。「学生運動特集」として発行された4号
（1960年10月）には、大島渚（1932-2013年）の「わが学生運動の反省——1953年京都」が掲載
され、「一貫して非党員であった」という大島が、京都府学連の委員長になり全学連が提起した学
園復興会議の「責任者」となる過程を、当時の京大学生運動の動向を踏まえて語っている。

宍戸の回想にある「戦前昭和期の問題をテーマにして論議していく研究会」について、当時の記
録を以下に紹介しておこう（「京都・現代史研究会より」『近代史研究』3号、1957年12月）。

本研究会は、井上清、小山弘健、岸本英太郎、渡部徹の4氏によって、明治維新から現代ま
での時期を共同研究により討論を進め、その成果をまとめることを第1期の目的として本年
[1957年—引用者]5月に発足した。テキストに井上清、鈴木正四著『日本近代史』を利用。
研究会は毎月1、2回の割で三月書房で行なっている。研究会の参加者は、現在学生、研究者
あわせて約30名であるが、会の方針としてはテキストによる単なる啓蒙的な集まりではなく、
近代史および現代史の問題点をさらに掘り下げて研究することに主眼をおいている。

「現代史に関心をおもちの方」の加入を歓迎した研究会の会費は無料であったが、通信費月10円

と若干の印刷代の負担が求められた。研究会の第1期では、①自由民権と天皇制、②日本資本主義の確立、③帝国主義の形成、④全般的危機のはじまり、⑤大恐慌の全5回の研究会を実施し、続く第2期では、テキストを利用せず、月1回、4人が交代で個別テーマを講じるスタイルをとった⁽⁵⁾。

この4人が講師となりこのようなテーマを選んだこと、京大人文研の動きは重なっているようでもある。1954年9月に井上が京大人文研に着任してはじまった共同研究「米騒動の研究」の成果を引き継ぐ形で、1957年4月に共同研究「大正期の政治と社会」⁽⁶⁾が発足しており、この共同研究の問題関心ともかなりの程度重なり合う形で、三月書房での現代史研究会も続いていたのだろう。「大正期の政治と社会」班は、週1回の研究報告、資料検討、合評会を精力的に続けた。「大正期の政治構造の分析」に取り組んだ「大正期の政治と社会」班での成果は、1966年に発足する「社会運動の研究」班への重要な前提になったのである。

(2) 『大阪地方労働運動史年表』編纂事業

1950年代後半、大阪では有志の手による労働運動史・社会運動史の編纂事業がはじまる。そのきっかけを作ったのは、1920年代はじめにアメリカで片山潜の指導のもとで在米日本人社会主義者団を結成して日本での共産党結成を働きかけた経験を持つ渡辺春男（1889-没年不明）である。極東諸民族大会（1922年1月）に参加後シベリアから日本に帰国してきた渡辺は、ネームプレート製作の実業家として成功を収め、大阪・網島に豪邸を構えていたという。1956年1月、渡辺の自宅で渡辺のはじめての著書『片山潜と共に』（和光社、1955年）の出版記念懇親会が持たれた際、「出席者のあいだに、大阪地方労働運動史の研究の第一歩として、とりあえず年表だけでも編纂することの必要が強調され」たため、渡辺が「年表編纂のための資金の調達と研究者の参加について準備をはじめ」ることにし（大阪地方労働運動史編纂会1957）、ここに『大阪地方労働運動史年表』の編纂事業がはじまったのである。

渡辺の計画にいち早く協力を申し出たのは、弁護士の浪江源治（1903-76年）と実業家の松本広治（1904-89年）である。関西大学出身の浪江は、3.15事件（1928年）、4.16事件（1929年）の弁護を行い、1933年に日本労農弁護士団事件により検挙されるものの、戦後は再び弁護士として吹田事件（1952年）、近江絹糸人権争議（1954年）の弁護を行うなど、大阪の左派弁護士として活躍していた。東大新人会から非合法共産党に入党して4.16事件で検挙された経験を持つ松本は、戦

(5) 具体的には、渡部「合法無産政党と日共——日本における労働運動の組織問題」（1958年2月）、「護憲三派——日本におけるブル民運動の性格とその終結」（3月）、小山「昭和恐慌論——日本における独占体の本格的形成」（4月）、井上「東方会議——中国革命と二重外交」（5月）、渡部・岸本「満州事変の原因——日本帝国主義の危機」（6月）、講師不明「昭和期の文化運動——昭和期知識人のあり方」（7月）、岸本「2.26事件——軍閥独裁の過程」（8月）、岸本「日本における人民戦線の諸問題」（9月）、小山「準戦時体制論——新・旧財閥の関係」（10月）、井上「新体制運動——近衛・東条内閣論」（11月）、渡部「降伏論——太平洋戦争の性格」（12月）の全11回の講義を行っている。

(6) 井上（班長）、渡部、松尾、後藤が「米騒動の研究」から留任し、三宅一郎、山岡亮一、市原亮平、山本四郎、君村昌、中塚明、江口圭一、平林一、里上竜平が新たにメンバーとなった。1958年には飛鳥井雅道、小林幸男が加わり、1959年には、中村哲、岸本英太郎、信夫清三郎、木坂順一郎、高屋定国が加わった。以降顔ぶれはほぼ固定し、1964年から秋定嘉和、1966年から井口和起、佐々木敏二、大谷郁三、1967年から太田雅夫、1968年から掛谷幸平が加わって12年に及ぶ共同研究が継続された。

後に富士レジン工業を創業して経営者の立場にありながら社会運動を支えていた。

1956年7月に発足した大阪地方労働運動史年表編纂会の役員には、会長の渡辺以下、財政委員に浪江、松本、渡辺忠が、代表編纂委員に大阪府立大学の今井長二郎、大阪社会事業短期大学の孝橋正一が、事務長に名越祐助が就任した。大阪での金属労働運動の経験を持つ渡辺忠も、東洋シャッターを創業したばかりの経営者であった。渡辺を筆頭に、浪江、松本、渡辺忠、弁護士の古野周蔵（1892-1964年）、同じく弁護士の色川幸太郎（1903-93年）など、戦前から左派・無産政党陣営で活躍した弁護士や、共産党経験を持つ実業家による資金拠出が大阪の編纂事業の特色であるといえよう。その編纂事業の方針を、以下に紹介しておこう（大阪地方労働運動史編纂会1957）。

編纂の大体の方針は、全体を戦前前期・戦前後期・戦後期の三期にわち、各時期ごとに政治・政党運動・労働組合運動・農民運動の史実をあつめ、これとやらんで部落解放運動・市民および業者の運動・沖縄人運動・朝鮮人運動・婦人運動・青年および学生運動・消費組合運動・平和運動・文化および科学運動などの一般社会運動の史実をも収集しようというのであります。この分類におうじて、研究者をそれぞれの班に編成しました。

このうち戦前前期の執筆を担当した師岡佑行（1928-2006年）と秋定嘉和（1934年-）の2人が日本史研究者であった以外は、今井や孝橋のほか黒住章など社会政策学会に属する研究者であるか、あるいは梅川勉、和田一雄ら農業系の研究者が執筆を担当している。ただし、戦前・戦後の部落解放運動は南清彦が木村京太郎、松田喜一ら大阪の活動家の援助を受けて執筆しているし、戦前・戦後の沖縄人運動は富本繁と井之口政雄が執筆、戦前・戦後の朝鮮人運動は趙成勲が執筆するなど、当事者に近い立場での執筆もなされている。

そしてこの多岐にわたるテーマの原稿をまとめ、「総括・統一と補充」を担ったのが小山であり、小山を助けたのが、当時大学院生の小山仁示（1931-2012年）であった。資金を拠出した人びとに加え、37人の研究者と100人以上に及ぶ資料提供者のかなりの部分も、当事者として運動を担った経験を持った。その経験を後世に残すべく「何ら上からの力にたよらず、各人の内からの発意と協力によってなされた」この編纂事業は、「大阪地方の運動の歴史」そのものであったと総括されたのである（大阪地方労働運動史年表編纂会1957）。

（3）大阪現代史研究会・大阪地方労働運動史研究会の発足

『大阪地方労働運動史年表』編纂事業の場で紡がれた人びとのネットワークからは、新たな研究の〈場〉も生まれていく。まずは小山仁示や北崎豊二（1929年-）らが属する大阪歴史学会（1948年創立）の近代史部会は、1956年7月に近代史部会の機関誌『近代史研究』の発行をはじめ、その創刊号には大逆事件の生き残りとして再審請求を起こす坂本清馬（1885-1975年）の「幸徳秋水演説稿」を掲載した。2号（1957年8月）には、小山弘健「日本社会主義史の研究によせて——古典書などのあやまりについて」を掲載して社会運動への関心を強め、3号（1957年12月）から5号（1958年10月）までは、大阪歴史学会近代史部会と京都現代史研究会との共同編集で発行して

いる。

小山仁示と北崎はさらに一步を進め、「現代的要請」に「こたえ」ようと1958年6月に新たに大阪現代史研究会を結成した。この「現代的要請」とは、「学び」への人びとの渴望であったにほかならない。大阪現代史研究会の最後の事務局を務めた尾川昌法（1937年-）は、「国民文化会議の成立に象徴される、労働組合と緊密に結びついていた国民的文化運動の高揚」が大阪現代史研究会を支えたのだと語る。実際、大阪現代史研究会は関西国民文化会議（詳細は黒川2016参照）の加盟団体でもあった。以下、大阪現代史研究会の顔ぶれを紹介しておこう（尾川2007）。

〔大阪現代史研究会の一引用者〕主要な報告者をあげると、市原亮平、小山弘健、小山仁示、芳村治雄、中瀬寿一、趙成勲、海本丈夫、藪内吉彦、福原明知、巽亮らの他、学生を含む共同研究グループである。「一年のあゆみ」という記録は、会員は「いちじるしく増加し150名をはるかに突破」と発展ぶりを記している。すでに著名であった少数の研究者、大学教員の他は、銀行員、中高教員、予備校職員、鉄工所職員、商店員、電信電話局・郵便局職員、学生など多彩で、専門家と働く人びとの共同研究集団であった。

大阪現代史研究会の事務所は、『大阪地方労働運動史年表』編纂事業を支えた浪江源治の事務所（浪江法律事務所）に置かれ、機関誌『大阪現代史研究会会報』1号（1958年11月）、2号（1959年1月）、改題して『現代歴史』3号（日時不明）、4号（1959年12月）を発行し、さらに改題した『現代の歴史』5号を、創立3周年記念号として発行する（1960年8月）。そのテーマは多岐にわたり、明治史研究、明治人物史研究、大正史研究、昭和史研究、戦後史研究、日本のナショナリズム研究と研究会活動を重ね、女性部会・哲学部会・社会思想史部会などの各部会の活動も活発であった。

さらに小山仁示は、『大阪地方労働運動史年表』の成果のうえに「大阪の運動史研究に集団的に着手することを目的」に、大阪地方労働運動史研究会を設立し（機関誌『大阪地方労働運動史研究』）、その例会会場もまた浪江法律事務所に置かれた（『大阪地方労働運動史研究』1号、1958年12月）。大阪現代史研究会と大阪地方労働運動史研究会の顔ぶれはほぼ重なっているのだが、後者には、4号（1960年8月）に「1920-30年代の大阪地方労働者農民運動史の一側面——小岩井浄をめぐって（1）」を寄せた岩村登志夫が参加していた。のちに小山仁示は、自身が資金面で支え続けた同研究会の成果を「岩村登志夫という研究者を育てたこと」であったとまで語っている（谷合1999）。実際、10号（1969年12月）まで発行を続けたものの赤字続きで、「50年分裂」期に大阪での共産党経験を持ち大阪現代史研究会の会員でもあった吉野亨（「私は「球根」をいかに「栽培」したか」『運動史研究』4号、1979年）が経営するよしの書店からの機関誌発行を断られる始末であった（谷合1999）。

こうして研究者・当事者も巻き込んだ研究の〈場〉となった大阪現代史研究会と大阪地方労働運動史研究会は、1958年11月に労働運動史研究会（1957年結成）⁽⁷⁾から学会出席のため大阪にやっ

(7) 労働運動史研究会は、民科歴史部会（機関誌『歴史評論』）と歴史学研究会（機関誌『歴史学研究』）を母体として発足した（二村1983）。

てきた塩田庄兵衛、黒川俊雄、田沼肇、高橋洗四を迎えて「東西交流研究者懇談会」を開催している（京都現代史研究会から高屋定国も参加した）。また、大阪現代史研究会は、名古屋大学法学部の信夫清三郎研究室との研究交流（信夫のほか、木坂順一郎、那須宏、山田公平ら）も深め、京都現代史研究会も加えたこのような人びとのつながりが、『講座現代反体制運動史』全3巻（1960年）の刊行を実現していく。「明治・大正期」を扱った第1巻は信夫が、「戦前昭和期」を扱った第2巻は渡部が、「戦後期」を扱った第3巻を小山弘健がそれぞれ監修し、東京・名古屋・京都・大阪の若手研究者の力を得てまとめた本講座は、眼前の60年安保闘争に対する歴史研究者ならではの対抗でもあったのだ。

3 渡部徹の歴史学——政治主義批判から実証主義へ

(1) 政治主義批判の提起

さて、このように1950年代後半の京都・大阪で文化運動として現代史への関心が深まっていたことと、渡部の研究も無関係ではなかった。渡部は、既述のように京都現代史研究会で一般向きの研究会を担当していたし、後述する『京都地方労働運動史』では、かつての活動家との協働をはじめていた。第1節で述べたように、この時期自身の歴史研究を呪縛してきた共産党の「権威」から脱しつつあった渡部は、「労働運動史研究の反省——若干の史実についての問題点提起」（『近代史研究』3号、1957年12月）により、自身の方法的転回を遂げた。それは、共産党の「権威」に追従する政治主義的研究への訣別の辞であった。以下、長文を厭わず引用しておきたい。

[労働運動史研究の課題として—引用者] 最も根本的なことは、従来の研究視角に重大な点で誤りが少くなかったということである。率直に言って、私をふくめ、これまでの進歩的研究者に共通した研究視角は、常に運動を評価するにあたって夫々運動のとった政治的見解を基準にしていたのである。そこへ「左翼権威主義」によって毒されたのだから、研究が捻り豊かな結果をうみだすことは、きわめて困難であった。

具体的にいえば、これまでの運動の評価は政党運動も労働組合運動に対して、一様に、たとえば革命に対し、天皇制に対し戦争に対し、組織なり、個人なりがどういう見解をとったということが第一義的な価値判断の基準にあげられてきた。（中略）

このような研究視角からは、運動史研究が、そのかかげる綱領・政策・方針を調べることに以上で、それもきわめて大まかな材料で処理しうるのである。事実史的な探究は、さほど大きな意味はもたされない。また如上の観点で低くしか評価されない運動や組織については、断片的なマイナスの材料だけで片づけられてしまうのである。（中略）

政治主義的・思想史的観点で運動史を研究したことが誤りであったとすれば、運動史の研究視角は、どこにおかれなければならないのであるか。私は運動史の研究視角は、何よりも、その組織なり運動なりが、現実は何をし、労働者大衆に現実は何をもたらしたかという、大衆行動の事実の巨細な総合の上に立たなければならないと思う。大衆運動の思想側面は、それからみれば第二義の意味しかもちえないと思う。極端な例をあげれば、ある運動が、思想的には幼

稚であり、ある場合には大きな誤りがあるとしても、それによって広汎な大衆を動かし、現実的に労働者の要求に答えて、労働者に与えたものが大きな場合には、その運動は高く評価されなければならない。これに反し、方針が思想的に高く、純粋度が高くても、現実には大衆の行動を組織できず、大衆に与えることの少ない運動は、低く評価されなければならない。これ位のことは、もとより明らかなはずのものであるが、事実は逆立ちして、とらえられていることが多かったのである。

同号に掲載された岸本英太郎「日本の端緒的労働組合の性質」でも、片山潜らが組織化した1890年代後半の労働組合に「政治性＝社会主義的性格」を強調することを「誤り」と指摘している。第1節で見たように、「32年テーゼ」／講座派理論を適及的に適用する形で日本近代史を捉えようとする方法が批判されていたように、政治主義から実証主義への転換は必然であった。

渡部のこの論考には、かつて『近代日本労働者運動史』で「はじめての階級史観にもとづく本格的な運動史」を発表した渡部が「前著の方法論を否定する」ものとして、「驚くほど大きな反響があった」という（渡部1993）。こうして「労働者大衆」の声に耳を傾ける労働運動史研究へと渡部が踏み出したことには、『京都地方労働運動史』編纂事業の経験が大きく影響していた。

(2) 『京都地方労働運動史』編纂事業

「京都地方の労働運動史を編纂できないだろうか」という総評京都地評・京都府労政課の意向を耳にして、「かねてからその必要を痛感しつつ時期を待っていた」渡部は、この機に岸本や同志社大学の住谷悦治らと協力して科学研究費を申請することとし、その交付を得た1954年12月から編纂事業がはじまった。その編纂にあたっては、第一段階として「資料（日刊新聞、組合・政党機関紙、その他文書・文献）を出来るだけ広範囲に渉猟し、京都の運動に関係ある一切の記事と文書をカードに採録し、これを整理することによって詳細な京都地方労働運動史年表を作成」したうえで、第二段階として「この年表にもとづいてそれぞれの時期の活動家から聴取調査を行って、資料的事実の当否を含め、その前後の事情を明らかにする」という方法をとった。今でいう聞き取りの際になぜ年表を必要としたかについては、以下に引く渡部の一文に集約されている（京都地方労働運動史1959）。

すでに我々の経験によって、聴取調査は、聴き手・語り手の双方とも、正確なよるべき材料をもたなければ、聞くべき問題をたずね落としたり、あとで資料的事実との間に齟齬を来す恐れがあったりすると同時に、語り手も、古いことを想起する手がかりがなければ、記憶をよびおこすことが困難なことが多いだけでなく、数年の年代の記憶ちがい、色々な事件の混同が不可避であるからである。

のちに渡部は、「史料にもとづいた素材の蒐集とその整理があるていど出来て」から、聞き取りを行うという厳密な「手続き」を踏まない限り、聞き取りは単に「興味本位の物語りに終って歴史とはなりえないであろう」とまで述べている（渡部1966）。

この渡部の強い信念に基づき、多くのアルバイトによる資料のカード筆写に加えて写真撮影も行い、1956年秋までに「年表」が完成する。この年はじめからは、辻井民之助、高山義三を皮切りに「聴取調査」がはじまり、春にかつての運動参加者の親睦団体として発足したばかりの京都旧友クラブに編纂事業への協力を呼びかけた。ここに編纂・刊行事業の母体として京都府・京都市・総評京都地評・京都民間労・渡部ら執筆者グループが結集した「京都地方労働運動史編纂会」が誕生し、その代表者には部落解放運動の指導者朝田善之助（1902-83年）が就任することになった。

こうして聴取調査の規模も飛躍的に拡大し、最終的には足掛け4年で130人にのぼる当事者からの聴取調査を行い、並行して執筆作業も進めた。原稿用紙6,250枚にも及ぶ大著となった本書が世に送り出されたのは、1959年12月のことであった。その構成と執筆者を以下に示しておこう。

第1篇「明治時代」	執筆者・山本四郎
第2篇「組合運動の生成と発展（大正2-14年）」	執筆者・松尾尊允
第3篇「評議会と労農党の活動（大正14-昭和3年）」	執筆者・高桑末秀
第4篇「闘争の激化と戦線の錯綜（昭和3-7年）」	執筆者・渡部徹
第5篇「戦争と運動の衰退（昭和7-20年）」	執筆者・吉田樹美子

「労働者大衆」の声に耳を傾けようとする編纂方針から、「少なくとも無慮何千人かの無名戦士の使命と事績を永く後世に記録したこと、また今後の研究者のいろいろな観点からの研究に素材を提供しえたこと」を、渡部は大きな誇りとした（京都地方労働運動史1959）。

ただし、「記述は文書的・談話的資料の多寡にもっぱら依存せざるをえない」ため「重要と推測される運動や組織、人物に関しても、よるべき資料が乏しければ、単に指摘するにとどめざるをえなかった」という限界も、渡部は自覚していた（京都地方労働運動史1959）。そのような限界を生じさせた背景には、「かかれた史料そのものをあくまで出発点とすべき」という渡部の経験に即した信念があったからでもあった。

ここで注意しておきたいのが、「全国的運動」と「地方的運動」の関係である。渡部は「本書のように地方的運動の微細の点にまで立ち入って記述すれば、それぞれの事項や運動は必ずしも全国的運動や運動の一般的法則に、ただちに即するというわけには行かない」とし、しかも「地方的運動」の場合には、「人と人との関係や偶然が決定的要因となることも少なくない。ジグザグは不可避である」と、「全国的運動」の動きを「地方的運動」に機械的に当てはめることの危険性を指摘する（渡部1960）。そのうえで、「全国的な動きを編さんスタッフがわきまえていなければ」地方労働運動史の執筆は困難であるとして、「京都地方労働運動史」各執筆者の高い能力を評価することにもなる（渡部1960）

並行して、渡部は『兵庫県労働運動史（戦前編）』（1961年）の編纂事業にも加わっており、結果的に京都・兵庫・大阪の各地方労働運動史の編纂事業全てに関わりを持つことになったのだった。

(3) 「社会運動の研究」班とその成果

1966年4月、京大人文研に渡部を班長とする共同研究班「社会運動の研究」が発足した。まずは「明治期から1928-29年の社会運動の実態とその思想の究明」を課題とした本研究班の参加者は、これまで井上を班長とする「大正期の政治と社会」班（第1節参照）に参加してきた松尾、飛鳥井、太田、岸本、高屋に加え、新たに大森誠人、菊池光造、熊沢誠、辻野功、中野保男、福本茂雄（岩村登志夫）、前川嘉一が加わった。1967年からは、大前朔郎、富岡次郎、大学院生の田中真人が、1968年からは赤岡功、足利末男、小林牧子が、1971年からは秋定、斎藤勇、石田良三郎が、1972年からは姜在彦、横山俊夫、木坂が加わることになり、その成果物として渡部・飛鳥井編『日本社会主義運動史論』（三一書房、1973年）を刊行するに至る。福本は岩村名義で、本研究班の成果をふんだんに盛り込んだ『コミンテルンと日本共産党の成立』（三一書房、1977年）を刊行している。

この顔ぶれのうち注目すべきは、大森誠人（1929-95年）である。東京に生まれ東京商科大学を中退したのち共産党国際派オルグに転じて関西にやってきた大森は、京都総評オルグ、全金京滋地本書記を経て、共産党大阪府委員を務め、1961年7月に構造改革派として共産党を離れ、社会主義革新運動を経て統一社会主義同盟を結成した活動家であり理論家であった。「社会運動の研究」班が発足した1966年から自治労大阪府本部に勤務し、1974年に大阪市政調査会に転じるという大森のキャリアからは、大森の研究班への参加には社会運動の現場と研究者をつなぐという意図もあったのだろう。

1969年4月からは、3月末で終了した「大正期の政治と社会」班を継ぐ「大正・昭和初期の時代思潮と世論」班（井上清班長）が発足し、渡部、松尾、飛鳥井、太田は「社会運動の研究」班と重ねてこちらにも参加する。第1次日本共産党の歴史的経験を日本近代史の一翼に位置付けた松尾の名著『大正デモクラシー』（岩波書店、1974年）は、井上班での大正期研究と渡部班での社会運動史研究の交点に成立したともいえる。

「社会運動の研究」班の第2期は、1973年4月にはじまる。第1期に引き続く形で「両大戦間の運動の分析」に進んだ本研究班の顔ぶれは変わらず、新たに古屋哲夫、宮田栄次郎、池田信、千本秀樹、西川洋、尾崎ムゲン、守川正道、大前真らが参加する。同時に「大正・昭和初期の時代思潮と世論」班に引き続いて発足した「1930年前後の政治と社会」班（1975年4月以降「日中戦争期の政治と社会」班に改組）とも、顔ぶれが重なり合う関係が続いた（この班には渡部、古屋、松尾、太田、木坂が参加）。

こうして京大人文研のうちに重なり合っていた研究の〈場〉が生み出したのが、京大人文研教授の農業史学者・飯沼二郎（1918-2005年）と朝鮮史研究者・姜在彦（1926-2017年）の出会いであった。飯沼は1954年に着任して以来、ここまで人文研の共同研究では、「村落共同体の比較研究」（清水盛光）、「封建共同体とその崩壊」（同前）、「封建社会の比較研究」（同前）、「アジアとヨーロッパにおける革命の比較研究」（桑原武夫）、「人類の比較社会学的研究」（今西錦司）、「重層社会の人類学的研究」（梅棹忠夫）などに参加し、自身は「産業革命と現代社会」「世界資本主義の研究」などを班長として率いてきた。その飯沼は、1965年2月にアメリカ軍による北ベトナム爆撃（北爆）がはじまると鶴見俊輔らとともに京都ベ平連を作り、さらに神戸入国管理事務所に出入

国管理法違反容疑で収監されている在日朝鮮人・任錫均の釈放を求めて個人誌『朝鮮人——大村収容所を廃止するために』（1969-91年、全27号、ただし21号以降は鶴見俊輔が編集を担当した）を発行するなど、社会運動に相当のエネルギーを割くようになってもいた。

そのような飯沼と、朝鮮総連を離れて在野で朝鮮史研究に取り組んできた姜在彦が、1975年4月、京大人文研の共同研究として飯沼を班長とする「日本帝国主義の朝鮮支配」班を発足させた。安秉珩ら気鋭の朝鮮史研究者に加え、宮嶋博史、水野直樹、堀和生、原田環ら当時大学院で朝鮮史を学ぶ若手研究者、さらには実業家でありながら青丘文庫を設立して私費で朝鮮関係文書を収集・公開した韓哲曦（1919-98年）らが参加した本研究班からは、多くの朝鮮史研究者が誕生している。1981年3月の飯沼の定年退官とともに、本研究班の一部のメンバーが姜在彦を代表に「朝鮮民族運動史研究会」を発足させ、これが「朝鮮近現代史研究会」と改称して現在も続いていることも付記しておきたい（神戸市立中央図書館で開催している）。

このように、アカデミズムに閉じることなく当事者的立場の人びとを迎え入れた議論と研究の〈場〉を可能としたのには、敗戦後の民科大阪支部の経験、1950年代後半からの文化運動としての歴史学運動の経験が大きく影響していただろう。科学史家・廣重徹（1928-75年）は、民科の活動において「職場や居住地におけるサークル」を基礎とする大阪と、「大学の研究者の専門分野ごとの集まり」を基礎とする京都の「性格」の違いを指摘し、京都は大阪を「街頭的」と、大阪は京都を「サロンの」と批判し合っていたと記す（廣重1960）。渡部は、この「街頭的」性格と「サロンの」性格をとともに纏う研究者であったのかもしれない。

おわりに

1978年11月、中江平次郎総評大阪地評議長を理事長として、財団法人大阪社会運動協会が設立され、『大阪社会労働運動史』編纂事業が具体化した。当初は小山仁示・広川禎秀らが監修の予定だったが、編纂方針をめぐる中江との衝突もあって、1980年7月に小山・広川は辞任して、かわって渡部が監修者になったという（谷合1999）。その際、大阪社会運動協会でアルバイトとして編纂のための資料収集に従事していた三輪泰史（1950年-、当時大阪市立大学大学院生）は、京大人文研の渡部研究室に呼び出され、「小山、広川には辞めてもらう、このことを二人に伝えるように」と言い渡されたのだと筆者に語った。三輪は二人にこれを伝えたが、その時の小山が受けたショックは相当大きかったと感じたようだ。

あれほど党派性を嫌い、政治性を嫌ったはずの渡部が、なぜこのような党派的・政治的行動をとったのか。その要因のひとつには、1966年から70年にかけての部落解放同盟京都府連の分裂問題をめぐる抗争（朝田善之助が掌握する府連に対抗して、共産党系の府連が成立し、両者が京都市左京区の文化厚生会館の帰属権を争った）で、『京都地方労働運動史』編纂事業以来親しかった朝田の立場を、渡部が支持したこともあっただろう。そのうえ、1969年に大阪市の中学校で起きた共産党系教員への部落解放同盟の糾弾から、共産党と部落解放同盟が激しく対立するという事態も生じ（矢田事件）、共産党の立場を支持するか、部落解放同盟の立場を支持するかで、研究者のあいだで激しい分断が生まれてもいた。

ともあれ、小山と広川に加え、北崎と尾川も編纂事業から去り、これ以降『大阪社会労働運動史』の執筆者の多くは、共産党とは距離のある人びとで占められていくことになった。本稿でこの点の是非を問おうとは思わないが、しかし『大阪社会労働運動史』で共産党系の運動の叙述が、総評・社会党系の運動に比して薄いことは否めない（編纂にあたって総評の支援が大きかったことが決定的要因ではあるだろうが）。その限りで、渡部の党派的・政治的行動の残した傷跡は、今も癒えるには至っていないのである。

（くろかわ・いおり 神戸大学大学院国際文化学研究科協力研究員）

【付記】本稿を著すにあたっては、尾川昌法氏（部落問題研究所理事長）、三輪泰史氏（大阪教育大学名誉教授）のご助力を賜りました。心より感謝申し上げます。

【付記】本稿は、科学研究費補助金 基盤研究（C）課題番号 19K00320「戦争と革命の20世紀を生きた表現者たち——左派社会運動と文学運動の交錯」（研究代表者・黒川伊織）による研究成果の一部である。

【参考文献】

- 大阪地方労働運動史編纂会『大阪地方労働運動史年表』大阪地方労働運動史編纂会、1957年
渡部徹編著『京都地方労働運動史』三月書房、1959年
廣重徹『戦後日本の科学運動』中央公論社、1960年
渡部徹『『京都地方労働運動史』の編さんを終えて——感想と編さん方法について』『近代史研究』3号、1960年1月
渡部徹「日本共産党について——ある旧党員の体験と今日の問題性」『現代の理論』34号、1966年11月
渡部徹「追憶談 岸本さんの人から」『経済論叢』第117巻5・6号、1975年5月
渡部徹「特高・留置場・軍隊（上）」『さんいち』10・11号、1980年7月、1981年1月
渡部徹「特高・留置場・軍隊（下）」『さんいち』11号、1981年1月
小山弘健『途上にて——回想と感想』現代史研究所、1981年
「渡部徹教授略歴・著作目録」『人文学報』51号、1981年3月
渡部徹「私の運動史研究——日本共産党とのかかわりを中心に」『労働調査時報』710号、1981年5・6月
二村一夫「労働運動史研究会の25年」『労働運動史研究会会報』5号、1983年4月（オンライン版 <http://nimura-laborhistory.jp/roshiken25nen.html>、2020年3月31日最終閲覧）
小山弘健『戦前日本マルクス主義と軍事科学』エスエル出版会、1985年
渡部徹「思い出すまま（二）——『大阪社会労働運動史（戦前編上・下）』をめぐって」『大阪社運協月報』65号、1993年4月
渡部徹「思い出すまま（三）——『大阪社会労働運動史（戦前編上・下）』をめぐって」『大阪社運協月報』66号、1993年5月
『渡部徹先生を偲ぶ——渡部徹先生を偲ぶ会の記録』私家版、1995年
『追憶——故渡部徹先生』私家版、1995年
『滄海の波紋——大森誠人 大森英子遺稿・追悼集』私家版、1997年
谷合佳代子「『大阪社会労働運動史』の編纂をふりかえって」『大阪社会労働運動史』8巻、1999年12月
尾川昌法「きれぎれの回想と感想」『歴史評論』685号、2007年5月
黒川伊織『『山河』と関西国民文化会議』細見和之、山田兼士、宇野田尚哉、黒川伊織、季村敏夫、丁章『山河（復刻版）解題』三人社、2016年